



神奈川・レスキューサポート・バイクネットワーク 会報第24号

KANAGAWA Rescue Support Bike Network News

2005年4月1日号, No.24

第24号の目次

- 1、2004年度総会報告(2005.1.23) ...太田隆行
- 2、新潟県中越地震支援活動報告 ...沢田健介
- 3、玄海灘地震雑感 ...河内善徳
- 4、安全運転講習会受講記 ...後藤猛
- 5、ヨルダンより(2005.3.19) ...池田喜由
- 6、編集後記

2004年度神奈川R3総会報告

2005.1.23

太田 隆行



去る1月23日、神奈川R3第7回総会が神奈川県民活動サポートセンターで行われました。副代表太田の進行で始まった総会は今も支援活動が続く中越地震の影響もあって緊張感の漂う中行われました。手塚事務局長による2004年度活動報告、手塚事務局長、山田会計監査より報告の2004年度会計報告も満場一致で承認されました。同じく事務局より提案の2005年度活動計画及び予算案につい



ても満場一致で承認されました。新年度役員についても事務局案に異論はなく満場一致で承認されました。

2005年度代表

井上哲也

1年ぶりに代表再登板となった井上哲也より「昨年の災害支援の活動を

通じてR3メンバーは各個人の深い人生経験を持った。また活動時必要なスキル、装備も確認が出来た。この経験をメンバー間で共有する

ことが団体の進歩につながる。」との挨拶があり総会は無事に終了しました。

新年度の主な役員、リーダーは下記のとおりです。

代表	井上哲也
副代表	神林邦彦
同	太田隆行
同	矢代幸雄
同	後藤猛
事務局長	辻谷圭
会計監査兼震災活動研究分科会リーダー	山田泰
会計監査	梶エミ子
バイク分科会リーダー兼北部地区リーダー	渡辺和也
情報通信分科会リーダー	古賀陽一
東部地区リーダー	夏賀英樹
南部地区リーダー	手塚則生
西部地区リーダー	永山充



また、総会後は恒例となった新年会が行われ新潟中越地震支援活動等の情報交換他、様々な話題で盛り上がりました。

爆睡(酔?)者も出た新年会

新潟中越地震支援活動報告

2005.3

沢田 健介



2004年10月23日から早くも5ヶ月が経過した。中越地方では震災後19年ぶりという豪雪を乗り切り、ようやく春の気配が感じられるようになってきた。会報第23号では震災後から2004年12月19日までの活動内容を報告させていただ

いたので、今号では第23号の続きを報告します。なお、報告する活動はすべて新潟県川口町の川口町復興ボランティアセンターで行いました。

12月25日:

この日の中越地方は関東地方と同様に非常に良い陽気だった。12月

19日に川口町災害ボランティアセンターは川口町復興ボランティアセンター(以下 VC)と改称され、災害ボランティアセンターがあった西川口の「ぬくもり荘」から道路を挟んだプレハブに移転したVCの受付班・活動班・元気もりもり隊、そして私が所属する車両班が移転先の同じプレハブの1階を活動拠点としていた。この日のボランティア登録数は県内外あわせて161人。主なニーズは家屋周辺の片付けと元気もりもり隊による心のケア活動だった。私は車両班のドライバーとして西川口・和南津・田麦山など各地の活動場所までボランティアさんの送迎を主にしていた。夕方の送迎で偶然、神奈川RBの永野さんを田麦山の小学校前からVCまでお送りした。VCに戻ると、同じく神奈川RB隊員である永野さんの奥様も活動から戻って来られるところだった。永野さんの奥様は川口中学校敷地内の仮設住宅(川中仮設)で、私と11月28日に一緒に元気もりもり隊の活動をした六日町のSさんと一緒に活動をされていたとのこと。Sさんとも再会することが出来た。この日の夕方からVCでは、VC～小千谷市の宿泊所への送迎をすることになっており、夕方小雪が舞う中、中型バスで20名ほどのボランティアさんを小千谷市の宿泊所に送り届けた。小千谷市の宿泊所は旭町にあるピンク色の大型テントのうちの1基で、隣にあるもうひとつの大型テントでは中越元気村が活動している。送迎から帰着後、長岡市の極楽湯で入浴し、VCに戻って就寝。

12月26日:

夕方ボランティアさんを小千谷に送り届ける訳だから当然朝も小千谷からVCまでのお迎えがある。小雪が舞う中、朝7時過ぎに車両班リーダーのHさんに見送られながら小千谷市の宿泊所に向かう。宿泊所はピンク色の大型テントの中に4～6名用と思われる小型テントが10～15基程度張られている所で、通路(大型テントの中に張られているテントとテントの間)には掲示板や宴会場(?)などが設置されている。18名のボランティアさんを乗せてVCに向かう。朝食の後、川口町各地へのボランティアさんの送迎を次々とこなす。この日は山間部の荒谷地区での家屋周辺の片付けのニーズがあり、その現場で一日中作業をしていたボランティアさんの中に東京の新宿に住んでいるというスリランカ人の青年がいた。彼は友人のブラジル人の青年と一緒に活動に来ていたが、二人はこの日の活動を終えた後、16時過ぎにスタッフに見送られながら笑顔でVCを後にした。そして18時過ぎにVCのTVのニュースで初めて、この日スマトラ沖で大地震があったことを知った。一日中、山間部でTVラジオも視聴することなく家屋の片付け作業をやっていた彼らが日本時間の午前10時に発生した地震のニュースを知るよしもない。おそらくはこの日のうちに母国で発生した大災害の発生を知った彼の気持ちを考えると切ない気持ちになった。日本で発生した災害のために遠路駆けつけてくれたスリランカ人の青年がいたことを、日本人として忘れてはならないと思った。

1月8日:

年が明けて初めてVCに来てみると、車両班に宮城県から来てくれた女性スタッフのIちゃんが加わっていた。雪道の運転もOKとのこと。頼もしい。この日の車両班スタッフは地元魚沼市在住のリーダーHさん・震災翌日から川口町入りしているIさん・東京から私と同じ週末だけやって来るバイク隊のTさん・沢田の4人。ボランティアさんの数は50人程度で、送迎が無い時間帯は比較的暇になる。そのため、この日は車による送迎の他に、空き時間に川口町社協のSさんから寄付

していただいた洗濯物の乾燥機を取り付ける工事とそのための電源工事をやった。Iさん・沢田の電気工事士コンビによって、プレハブから電源用のVVFケーブルを乾燥機があるプレハブの部屋まで引き込み、小千谷市のホームセンターで買った金具と排気用の配管を使って取り付けた。乾燥機はうまく稼働し、無事に運転試験も行うことが出来た。

1月9日:

この日の中越地方の天候は雪で、JR上越線の長岡駅から水上駅までの区間が運休になるなど、一部のボランティアさんの帰宅に深刻なダメージがあった。翌日に就職試験があるという横浜の学生や(前日まで帰らないのもどうかと思ったが)、帰宅出来なくなった新潟市の女子中学生などがいたが、無事に有志の方の自家用車による送迎のおかげで全員なんとか帰宅することが出来た。住民の方からも雪対策に関連するニーズが複数発生していたが、この日来てくれていた北は秋田から南は大阪まで50名余りのボランティアさんのおかげで、多くの雪対策ニーズに対応することが出来た。ここでいう雪対策とは具体的にはスノーダンプと呼ばれる器具やスコップを使った地上の雪かきが主なものとなる。屋根からの雪下ろしは地元の熟練者をもってしても危険が伴うため、新潟県から基本的にボランティアの人は従事してはいけないとの方針が出されており、社協が運営する川口町VCでは引き受けることが出来ない。従って、雪下ろしに関連する作業では、屋根から落とされた雪を除雪車(大型特殊車両)が通る公道までスノーダンプで運搬するのが主なものとなる。雪国出身者ではない者が大半を占めるボランティアの奮闘は続く。

1月10日:

この日は川中仮設の入居者の方が仮設住宅の屋根に積もった雪下ろしを一斉に行う日だったため、大勢の入居者の方とボランティアが共同で汗を流しながら雪対策にあたった。私も車両班の送迎が無い時間帯は無線と呼ばれ川中仮設の雪かきに刈りだされる。また、乾燥機設置と共に依頼されていたVCのシャワー室への洗濯機の設置工事も完了することが出来た。この日の活動中に気になったことがある。仮設住宅の入居者のうち、雪下ろし作業に来られた方は60歳以上と見られる高齢者の方が6割以上の多数を占め、40歳代以下の方がほとんどいない状況だった。雪で濡れた軍手を手につけて、作業の途中で疲れてしゃがみこんでしまった80歳代の一人暮らしのおばあさんなど、見ていて気の毒ですらある入居者の方が散見された。仮設住宅の入居者は報道されているとおり高齢者の方が多いようで、これら高齢者の方への適切な支援の方法を考えることが今後の課題であると感じた。そういった状況なので、10～30歳代が多いボランティアは貴重な若手として歓迎されていた。



移転後の川口町ボランティアセンター

1月29日:

この日の中越地方の天候は一日中快晴で心配していた積雪も無く、道路や駐車場のアスファルトはどこも良く乾いていた。この日は、12月19日に川口町災害ボランティアセ

ンタが規模縮小して川口町復興ボランティアセンタに改称されて以来、最大のボランティア登録数(120名)が記録された。11月の一日800人登録されていた頃と比べるとVCの規模もスタッフ数も桁違いに少ないので、これは非常に多い数字といえる。

加えて好天のため、ここぞとばかりに集中した住民の方からの雪対策ニーズががちりと噛み合った。そのため車両班としては非常に忙しい一日になった。一組送迎してVCに戻るや否や、車から降りる前にまた次の組の送迎に走るといったことを繰り返していたため、運行日誌等の記録が追いつかず、また、受付班でもスタッフの処理量を超えた仕事が集中した時間帯などは混乱していた。そのため終業(?)後は帳尻あわせと業務改善のため21時過ぎまで残業(?)する羽目になった。残業につき合わせてしまった車両班改め社協臨時雇職員のHさん・Sさんごめんなさい。

1月30日:

この日は、前日(1月29日)とは打って変わってボランティア登録数30人・ニーズ2件・天候は雪と、ある意味平和な一日になった。熊本から若い女性が新規で長期ボラに来てくれるなど、若手の長期ボラを沸かせる出来事や、川口町内で活動をしている他団体との調整、2月以降の川口町VCの体制の計画など、裏方では重要な出来事がいくつかあった。活動終了後、VCスタッフ数名と共に魚沼市にあるHさんのお宅に招かれてご馳走になる。Hさんの素敵な暖かい家族と、美味しい料理のおかげで一同感無量となる。VCを出発したのは22時30分とやや遅目になってしまったが、関越道も環八も空いていたおかげで、約3時間で帰宅することが出来た。

2月5日:

週末、VCに向かう日の朝は、横浜の自宅を早朝2:00~3:30頃に出発して、川口町に6:00~7:30頃に到着するようにしている。この日は関越道にスキー(orボード)客が多いため、関越トンネル付近でチェーン規制による長い渋滞が発生していた。そのため行程が大幅に遅れ、VCに到着したのは、活動開始時刻の10分前(8:50)だった。この日も車両班スタッフとしてボランティアさんの送迎や、活動現場での雪かきの手伝いなどを行った。川口町では、訪れる度に積雪量が増えており、今週はとうとう積雪量が3メートルを超えていた。そのような状況の中でも仮設住宅の入居者の方は壊れた自宅の被害が広がらないように自宅の屋根の雪下ろしと仮設住宅の屋根の雪下ろしの両方をやる必要がある。そのため、雪対策ボランティアが活躍することになる訳だが、人手不足が深刻であることから2月5日から数日間の予定で川口町と小千谷市に陸上自衛隊が投入された。実働部隊の規模は2個小隊(4分隊)程度と思われたが、広報や後方支援部隊などもしっかりと来ていたため高機動車が総勢10台程度町を訪れていた。12月15日の自衛隊撤退以来、久しぶりに見る自衛隊車両と隊員だった。あまり雪に慣れていない隊員が多かったらしく、雪上での作業には苦心しているようだった。

2月6日:

中越地方に投入された自衛隊員と同じく雪にはあまり慣れていなかったVCスタッフだが、ここ1ヶ月以上の活躍の甲斐あってか非常に良い動きが出来るようになってきていた。一般家庭からの雪かきニーズはフル稼働状態で、老若男女を問わず、VCは電話番号を一人残して全員出勤状態となる。「元気もりもり隊」は10代~30代の主に女性によ

って組織されている子供やお年寄りのケアをするグループだが、この「もりもり隊」のボラもこの日は本来の役務をお休みし、スコップとスノーダンプを車に積み込んで出勤していた。毎日が雪との戦いとなり大変な訳だが、そういう状況だからこそVCのスタッフの間には深い絆が出来る。「いつか誰かが住む町が災害でやられてしまったらきっと皆で駆けつけるよ」といった会話が以前よりも良く聞かれるようになってきた。帰路も、スキー客の帰宅渋滞に巻き込まれ、少し早目(18:30)に川口町を出発したにもかかわらず、自宅に着いたのは23:00だった。2月11日:

朝、横浜を出発した時間が先週と10分しか違わなかったことから、先週ひどい目にあった渋滞に再びひっかかるかと思いきや、さしたる渋滞は無く、朝8時前にVCに到着することが出来た。ボランティア登録数は久しぶりに(今年2回目)100人を超え、スタッフ込みで111人となった。ニーズは雪かきが90%で、残りが、元気もりもり隊による心のケア活動。曇り・晴れ・雪が交互にやってくるような空模様だったため、雪かきは天候の条件が良いタイミングを見計らって一気に片付けるといった、プロ(住民)並の段取りを徐々に実現することが出来るようになってきて、良い感じだ。一方で、少し前から顕れはじめていた長期スタッフ同士の間関係のもつれによるトラブルに幾つか触れることにもなった。基本的には金銭的な利益を目的としないボランティア活動の性質上、いたしかたないと考えられる内容、もしくは、スタッフによって問題を受け止める際の温度差があることに原因があるのだと私は感じたのだが、私自身が長期に渡って継続して活動をしているボランティアではないため、この考えを当事者たちに示せないでいた(勇気をもって示すべきなのかもしれないが、示しにくい)。

2月12日:

連休中日ということもあり、ボランティア登録数がスタッフ込みで130名弱となった。昨日よりも多い数字で、今年のボランティア登録人数としては最多記録を更新する。このうち15名が米沢市からマイクロバスで来てくれた団体だったため、車両班への負荷が大きい木沢地区への送迎がとても楽になった。ボランティアに来てくださった方の約3割程度の方が新規の方で、震災から3ヶ月半経った今も全国から多くのボランティアの方が復興のために訪れてくれることに感銘を受けた。年齢層は20歳代が最も多いが、ボランティアの方の職業も様々で、今日いらっしゃった方だけでも、大工さん、トラックの運転手さん、社会福祉士、歯科衛生士、国家公務員(特許庁)、教員、中学生などが見受けられた。活動内容は、昨日と同様、というか、このところおなじみとなった、雪かきと心のケアが2本柱だった。雪かき隊には地元の人や近隣の雪国出身者が多く来てくれ、段取りのノウハウが蓄積されてきたこととの相乗効果で非常に手際良く雪かきをこなしている印象を受けた。この他に、車両班スタッフのIちゃんは、一人プレハブの2階にこもり、2月13日に魚沼市で開催される国際雪合戦のユニフォーム作りをしていた。この夜の川口町は良く晴れており、夜は冬の星座が空一面に広がっていた。

2月13日:

VCスタッフ15名(3チーム)で、魚沼市(旧小出町)で開催された国際雪合戦に参加してきた。結果は、3チーム共、予選リーグでは1勝1敗で予選敗退。一試合たったの3分なのに、この3分が恐ろしく消耗する3分である。息をする暇もなく飛び交う雪球を避けながら地を這って雪

球を作りながら移動するといった、肉体的にとてもハードなものだった。私がいたチームは「おっちゃんず」という名の、はっきりいって VC 内では体力的・平均年齢的に最弱チームだったのだが、急遽、欠員補充でもりもり隊の若手女性スタッフ D が加わってくれたので、おっちゃん共の士気も上がり(笑)、善戦することが出来た(女性がいるチームは持ち点が男性よりも多くなるので有利)。このイベントは参加チーム数が大人子供合わせて 140 チーム位で、前夜祭などもあり、屋台の出店や、スノーモービルの無料体験乗車など、バイク乗りのハートもくすぐってくれる、楽しく盛大なものだった。震災復興の意味あいも強かったようで、日本全国から選手が集まって盛り上げてくれていた。この日だけで被災地を 5 箇所廻られる予定だという、和泉元弥一家のステージもあった。雪合戦の後は全員で VC に戻り、しっかりとミーティングで戦果(負けたくせに VC からの参加チームだったということで沢山の賞品を貰ってしまった)を報告した。帰路は関越道で若干の渋滞があったものの、この日の新潟県は良く晴れていたためチェーン規制もなく 4 時間程度で横浜に戻る事が出来た。

元気！かわぐちフェスタ 2005 会場



2月26日:

6:50 川口町到着。横浜から私の車に同乗してきた「あかつきボランティアネットワーク(AVN)」の尼子代表を川口駅まで送り、川口町唯一のコンビニ

で朝食を仕入れて VC に向かった。尼子代表は小千谷市で他県から来た AVN メンバーと合流し、小千谷市内で活動をされるとのこと。尼子代表と直接お会いしてお話したのはこれが始めてだったが、非常にしっかりとした方との印象を受けた。この日は、VC 前の「あおりの里」の駐車場で、川口町の復興祭「元気かわぐち！フェスタ 2005」が開催された。このため、多くのボランティアと町民の方が朝から会場設営と町内の至る場所へのキャンドル装飾作りを行った。あいにく祭りの途中に激しく雪が降ったりしたが、祭は雪に全く負けず盛況だった。この祭の趣旨は、川口町の町民から、震災発生以来、お世話になった多くの方々への御礼のメッセージを発信することだった。そのため、来賓として、川口町に災害派遣された自衛隊の幹部数名も招かれていた。そして、会場内に雪で作られたメッセージボードには、キャンドルアートで大きく、「みんなありがとう」と書かれていた。これはこれまで川口町のために尽力された全ての人々へのメッセージ。私も会場設営と、出店の手伝いなどをやりながら祭りを楽しませていただいた。地元の方が出していた出店の厨房内など、至るところに住民の方々の宴会場が出来上がっていて、住民の方々に手招きされて、ご馳走になってしまったり、売り物のお酒を勧められてしまったり、お土産をいただいてしまったりと、本当に自衛隊とボランティアが大歓迎された一夜だった。これまで中越地震への支援活動をされた全ての神奈川 RB 隊員を代表して、不肖、私、川口町の住民の方から「ありがとう」のメッセージを頂いたような気がするので、ここにご報告します。

2月27日:

この日の活動内容は元気もりもり隊による各拠点でのメンタルケア活動と、一般ニーズ(雪かき・障子貼り)への対応。この日私が担当したのは小千谷市内の一人暮らしのおばあさんのお宅までの送迎と、継続ニーズ調査だったのだが、この日このおばあさんのお宅の担当になった 7 人の女子高生ボランティアは、このおばあさんに逆接待されてしまい、障子貼りももちろん行ったのだが、コタツに入って手作りのお菓子やお茶などをご馳走になってとても楽しい一時を過ごしていたようだった(送迎に行った私まで、午前と午後 2 回の送迎の往路と復路でそれぞれお宅の茶の間に招かれてしまいお茶を頂いてしまった)。都会から中越地方を訪れているボランティアの中には、住民の方や豊かな自然と触れ合うことで、逆に癒されてしまったり、元気をもらって帰ってしまう人が急増している。ボランティアとしての本来の立場を考えると本末転倒なことなのだが、こういった住民の方との暖かい触れ合いを保ちながら復興への道筋をたどるのが、中越地震の復興スタイルなのかもしれない、と思った。帰路も、川口駅から横浜まで、AVN の尼子代表が同乗された。渋滞していたこともあり、お互いの活動情報の交換や、ボラ論・人生論、など、非常に幅広い話が出て、とても有意義だった。川口町を出発したのは 18:30 で、チェーン規制も実施されていなかったが、断続的なスキー客渋滞にはまってしまい、食事休憩を含めて移動に 6 時間要してしまった。



復旧した飯山線

3月19日:

3:00 に横浜の自宅を出発し、関越道赤城 IC ~ 塩沢石打 IC 間で降雪がありチェーン規制も行われていたが、渋滞らしい渋

滞はなく、6:30 には川口町 VC に到着することが出来た。VC で既に起床していたスタッフとお茶を飲みながら他のスタッフが起きるのを待っているとテレビカメラとディレクターが入ってきて、GW に放送するという番組の取材を受けた。この日の活動は、車両班としての送迎ではなく(送迎も 1 件だけやったが)、約 3 ヶ月半ぶりの一般活動だった。午前中の活動内容は木沢地区のお寺の本堂の中の土壁のがれきの撤去と撤去後の床の清掃。粉塵がひどく、マスクをしての作業だったが、手伝ってくれたボランティアさんに恵まれ、非常に手際よく作業を行うことが出来た。午後からは、田麦山地区で開催される「お別れ演芸会」の設営準備のニーズで、午前中と同じチーム(私を含めて 4 人)で、会場の設営に向かった。この演芸会は田麦山のボランティアセンターが 3 月末に閉鎖されることに伴う住民と田麦山地区常駐ボランティアとのお別れパーティーである。私以外の 3 人は、出店やステージなどの設営を行ったが、私は少し珍しいニーズに対応することになった。演芸会のステージで田麦山常駐ボランティア K ちゃんと VC スタッフ H さんによる少林寺拳法の演武があったのだが、その演武の指導である。高校時代に少林寺拳法をやっていたので、その技術と知識を活かしたニーズ対応である。K ちゃんは少林寺拳法二段の経験者。H さんは空手とテコンドーの経験者。他流派交流は意外とうまくいき、見映えの良い演武が出来上がった。夕方のスタッフミーティングの時間と重なってしまったために本番の演武を見ることは出来なかったが、

演武をやった二人から聞いた話では、アンコールを求められて2回目の演武を行ったほど好評だったとのことで、嬉しかった。川口町では道路の雪は完全に消え、この日の夜も星空が広がっていた。以前はカチコチだった雪も解けて軟らかくなり、風も暖かくなってきて確実に春の息吹が感じられるようになってきた。

3月20日:

前日に引き続き、一般ニーズへの対応と、イベント準備を行なった。また、昨日から取材を続けていた取材スタッフも我々の周囲を一日中取材していた。午前中は、東川口で開催された「雪祭り?」(正式名称失念)の準備を行った。具体的には、雪像(高さ4メートル位のアンパンマンと、となりのトトロの雪像)と、高さ8メートル位の雪で作った滑り台と直径6メートル位の巨大なかまぐらの制作だった。私は主に滑り台のコースと階段の作成を行なった。滑り台は子供が雪そりで滑走するもので、成り行き上、かなりのスピードが出る仕様になってしまった。この滑り台は、造成途中に地元の子供たちに発見されてしまい、すかさず子供たちの遊び場になってしまった。この作業は昼休み前に完了したので、午後からは中山地区のお宅の雪かきに対応した。台東区の社協の方と長野大学からの学生ボランティアの合計5名を率いて、高さ約3メートル、長さ約7メートルの雪の回廊、つまり、自宅の玄関前から、倉庫までの間をすっぽりと覆うように積もった雪を排除して、倉庫へのアクセスを可能にするための作業を行なった。この現場は実は昨日にも屈強なJR労組のボランティアさん6名が投入された場所で、非常に硬い雪(ほぼ氷)と狭い除雪した雪を捨てるための通路といった悪条件の下で全員へとへとになりながら作業を行なった。幅わずか1.5メートル、長さ約7メートルの雪の回廊を作るのに、結局二日かかっても終了することが出来ず、仕上げの作業は明日に持ち越されることになった。夕方は東川口の祭の会場で祭を楽しみ、夜は西山のスーパー銭湯までボランティアの送迎を行った。この日の活動中に発生した福岡の地震のニュースはVC内でも話題となり、福岡市内と福岡市近郊に実家がある2名のスタッフが急遽、福岡に帰宅することになった。

3月21日:

雪かきニーズを3件こなした。うち1件は相川地区の大雪による倒壊家屋の雪かきで、雪の量が非常に多かったことから今日一日では作業を終えることが出来ず、明日以降も継続することになった。残る2件は、20日にも作業を行った中山地区のお宅と、木沢地区の公民館。中山地区のお宅の雪は20日と比べてだいぶ軟らかくなっており、21日の作業により、目的としていた雪の回廊を完成させることが出来た。このお宅では、今週末に地震により壊れた家屋の修理のため大工さんが来ることになっているそうで、この回廊が完成しないと大工さんが入れず困っていたとのこと。このお宅はお年寄りの一人暮らしの世帯だったため、除雪面積の割には大量に投入されたボランティア(7人)に感謝して下さった。木沢地区の公民館では、1階部分の屋外にあるFFヒータの排気口埋まってしまったため、これを掘り出して暖房を使えるようにしてほしいというニーズだった。こちらも相川地区のお宅に行っていた7人で一気に片付けることができた。依頼者は木沢地区の総代さんで、私が11月に初出勤した際に木沢小学校の避難所での作業中にお会いしていた方でした。先方も私のことを憶えてくれていた。一日で3件の雪かきをこなし、夕方にはへとへとになっていた

が、スポーツをした後のようで、心地良い爽快感が残った。

.....'
以上が私の12月25日から3月21日までの活動の報告です。これから中越地方では雪が消え、国・自治体・住民による本格的な復興活動が開始されます。私は今後もRB隊員として、またVCでの活動を通じて知り合ったボランティアの方たちと共に、個人的にも継続して可能な支援を行っていく予定です。

玄海灘地震雑感・災害伝言ダイヤル使用記

2005.3

河内 善徳



ご存知の方もいらっしゃると思いますが、妻は佐賀県出身です。20日(日)発災当日は、11時ごろ妻の携帯に義姉から「地震があった」旨のメールを受

けていたのですが、前日録画したTVを見ていたためにそんなに大事になっているとは最初は知りませんでした。そんな中、大阪に住んでいるの妹から電話があり、福岡/佐賀が大変なことになっているらしく、山口の私の実家にも連絡がつかないとのことでした。妹と電話でそんな話しをしているうちに心配されたYさんからも私の携帯に電話がありました。妻と今、たまたま遊びに来ている妻の母はすぐにTVをつけ、状況を確認するとともに、佐賀の妻の実家に電話をかけましたが、すぐ切れてしまう状況で、NTTが回線使用の制限をしているか、全国からの電話の集中でかかりにくくなっているようでした。そのため、今回、初めて「171」災害伝言ダイヤルを使用してみました。まず「171」の後にメッセージに従い「2」の後に妻の実家の電話番号をダイヤルして、録音されているメッセージが無いかどうかを確認してみましたが、何も録音されていませんでした。

次に、「171」の後にメッセージに従い「1」の後に妻の実家の電話番号をダイヤルしてをダイヤルして伝言を録音しようとしたのですが、メッセージが流れ、現在、被災地からの録音に限定しているとのことでした。結局、なんとか15時ぐらいに電話につながり、妻の実家の被害は義母の七福神の湯飲みが落ちたこと、お墓にあった石灯籠が倒れたことぐらいで、たいした被害は無かったそうです。あとで聞いた話では、義兄は夜になって私が前、話していた災害伝言ダイヤルのことを思い出したそうです。

初めての「災害伝言ダイヤル」はこのような使用結果に終わりました。今までは単純に災害時「災害伝言ダイヤル」でメッセージの録音/再生ができるものと思っていましたが、発災直後は被災地からしか録音が出来ないので、NTTの災害伝言ダイヤルに関するページを見ると「提供開始当初は被災地以外からの録音のご利用を一時規制させていただく場合があります。」と書かれていました。あと、メッセージの保存期間は2日間とのことでした。勉強になりました。

妻は生まれてから結婚するまで佐賀で暮らしていましたが、その間地震をあまり経験したことが無く、神奈川に来て地震が多いことに非常

に驚いていました。TV でも言われているように、あちらのほうは地震が少なく、その分、地震に対する備えや心構えがあまり出来ておらず、その驚きも大きいかもしれません。阪神淡路大震災の時に、自分たちの住んでいる所はあまり地震が無いものと住民の方々は思われていたように記憶しています。やはり、日本で暮らすということは、地震から逃れられないということなのですね。先日、静岡-神奈川にまたがる活断層で30年以内にマグネチュード7~8クラスの地震が起こる可能性が最大16%以上と発表されたばかりで、我々もいつ被災者になるかもしれません。無事なときにはなるべく早く「災害伝言ダイヤル」にメッセージを録音し、家族や知り合いの人たちを安心させてあげてください。

安全運転講習会参加

2005.3.5

後藤 猛



3月5日(土)県警二輪講習会参加報告

(神奈川R B参加者;尾崎、夏賀、永野、後藤)

前日に降った季節外れの雪の影響で、参加者がだ

いぶ減ったとは言え、それでも総勢60名以上が集まる大変盛況な講習会でした。天候も朝の内こそ寒気が残っていましたが、講習が進むにつれ、春らしい陽気に包まれ、路面も乾き、ほぼ最高のコンディションでした。



夏賀、尾崎、永野、後藤の4氏

今回初参加の私でしたが、すっかり自己流が身につけてしまった自分に反省しきりで、昔々教習所の教官に言われた事が思い出されました。やはりこの様な講習会には今後もマメに参加したいです。基本をなくして応用なし。初心を忘れた頃に怪我が来る。二輪講習の後、R Bのメンバー4名で厚木防災センターを見学しました。暴風体験、地震体験、火災時の煙からの避難体験など、こちらの体験も大変重要と思いました。特に、煙が充満した建物から脱出する訓練など一度体験すれば、実際の場面で少しでも冷静

さを保てると思います。もちろん、実際の場面に遭遇したくもありませんが。

ヨルダンより

2005.3.19

池田 喜由

ヨルダンの「林蔵」こと池田喜由さんより寄稿を頂きました。池田さんは昨年(2004年)春より海外技術支援隊としてヨルダンにて活動を行っています。その暮らし振りの一端をレポートして頂きました。(太田)

以下寄稿文



今日は、仲間の紹介で、B公爵の別荘に遊びに行った。B公爵は、ヨルダンの大地主で大農園持ち主でもある由緒ある2軒のクリスチャン家の1軒だそうです。農場は、アンマン郊外と、シリア、イ

スラエルとの国境の直ぐ横、ゴラン高原下にあります。

今日は、このゴラン高原下の農場別荘に、我々ボランティアが招待を受けた。参加者を募ったら、21人の大人数になったが、公爵は一向に構わないらしい。

天然温泉プール付き、樹木が生い茂る広大な敷地を占める別荘は、公爵自身の説明によると、パラダイスをイメージして1961年に造ったらしい。

天然温泉の湯は、とうとう湧き出ており、プールから勢い良く流れ出る温泉は、直ぐ脇を流れるイスラエルとの国境、ヤルムーク川に注いでいる。プールサイドへは、分厚い石の扉があり、この扉は地獄と天国の扉だと言う。石の扉をくぐると、プールサイドには、自身の農場で取れた様々な果物がテーブルに山と積み重ねられている。男女数名のメイド(召使)が忙しく、我々の世話をしてくれる。早速スイム・パンツに着替え、周囲にパームツリーの生い茂る温泉プールで一泳ぎして優雅な一時を過ごす。

そして、プールサイドでの豪華なランチ付きの御招待には、ただただ恐縮してしまう。

目の前の ゴラン高原



しかも、直ぐ目の前がイスラエルに占領されている元シリア領土のゴラン高原。イスラエルの兵士はパトロールしているのが肉眼で見える。

ある宇宙飛行士は、宇宙船からは国境は見えなかったと言ったが、この地球上には厳然と国境が存在します。我々日本人は、国境を守るといことの大変さを余り実感していませんが、世界でもこの人々程、切実にこのことと日常的に向かい合って、生きているのは、他に類を

まり見ないのではないのでしょうか。

一面、そんな厳しい現実が横たわるヤルムーク川の直ぐ傍に居ながら、何の不安や危険も感ずることなく、温水プールで戯れることができる、この平和さにも、いささか戸惑いさえ感じます。ここはとても不思議な土地です。地底の世界、サブトロピカルな世界、国際紛争の世界、もてなしの世界。

いろんな意味で感動の一日でした。

【その他のイベント】

運営ミーティング 2/6、3/6

ボランティアのための救護法研修会・1/18、2/15、3/15

・ ・ ・ ! ! お知らせ ! ! ・ ・ ・

神奈川R B携帯電話用サイト開設中

<http://k.excite.co.jp/hp/u/krpkrb/>

(i-mode/vodafone/EZweb の各形式対応)

編集後記

今年こそは災害のない一年をと思ったのはほんの少し前でしたが早くも玄海灘周辺が地震に見舞われました。

地震の空白域とされていた地域での災害は日本列島全体が被災可能性の有る場所だと言う事を知らせるモノとなりました。これを警鐘と思うか悲嘆に暮れるかが大切だと感じます。

また、新潟中越地震の復興は未だ未だですが地震の後に襲う豪雪といった事象を目の当たりにして自然に対する畏怖を抱いたのも阪神大震災とは違った意味で重要な経験になったと感じています。

さて4月1日より高速道路での二輪車二人乗りが解禁になります。欧米に比べ遅れていたバイク文化が一気に進行するかもしれません。新しい制度を大切にしていきたいものです。

ところで春はツーリングに最高の季節です。花見、新緑、梅雨を迎えるまでに思い切り楽しみませんか？春の遅い北関東ももうすぐ麦穂が輝く時期です。是非一緒にしましょう。(お)

神奈川R B事務局

代表:井上哲也、事務局長:辻谷圭(3/20より西山圭)

郵送先:〒221 0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町2 24 2

かながわ県民活動サポートセンターレターケース No.81

Fax:045-312-1862(取次ぎ:レターケース No.81 宛て)

URL: <http://www2.airnet.ne.jp/krb/>

バイクによる災害時救援活動支援ボランティア

神奈川・レスキューサポート・バイクネットワーク会報(年4回発行)

発行者:神奈川R B会報担当 太田隆行

神奈川R B会報発行にあたりまして、お好み焼き「おにがわら」様のご支援を頂いております。みんなで行きましょう!

関西風・広島風 お好み焼き おにがわら

店主:中島信義 山梨県北巨摩郡大泉村 Tel:0551-38-4030

JR小海線甲斐大泉駅北約1.5km・ダイヤモンド八ヶ岳ホテル前

夏季(7・8月) 11:30~14:30、17:30~20:30(火・水定休、祝日は営業)

上記以外の期間 11:30~14:30、17:00~20:00(火・水定休)

「おにがわら」では新メニューを用意して皆様のお出でをお待ちしています。

念の為営業を確認の上お出かけください。

